炉辺史話　第一話

百合若大臣物語

百合若大臣のふるさとは何処か

入江秀利

はじめに

別府市春木の実相寺遺跡に、太郎、次郎、鷹塚と呼ばれる六世紀末の横穴式高塚古墳があります。文化七年（一八一〇）に豊後を訪れた伊能忠敬は、「九州測量日記」に『別府太郎同次郎ノ塚、百合若ノ愛セシ鷹緑丸ノ塚アリ、信用ニタラズ』と書いて一蹴していますが、この民間伝承はかなり古くからあったのでしょう。

百合若大臣は私が子供の頃から地元の英雄として身近な存在でした。

百合若の物語は、伝説で壱岐、筑前、豊後、肥後に古くからあったおはなし（伝説）が取捨選択されて一つの筋の語り物となりました。更に語り物の結末にギリシャの叙事詩「ユリシーズ」が加えられて一風変わった英雄物語になり、やがて幸若舞※の本「百合若大臣」と云う口承文芸として大成されたのでしょう。幸若舞の「百合若大臣話」が全国に伝播すると、正徳元年に近松門左衛門の「百合若大臣野守鏡」が上演されるようになりました。「百合若大臣」もそれぞれの土地の昔話や伝承が取り入れられ、東北地方にまで色んな百合若大臣物語が生まれたのでしょう。鷹の塚を始め中仙道の足跡石などのように百合若大臣に拘わるものと伝えられる遺物や遺跡があちらこちらにあります。

柳田国男は「百合若大臣の物語の舞台は、玄海の離れ小島から、豊後の府内までの間に限られていた。（物語と語り物）」と述べていますが、百合若大臣譚を構成する様々の伝承※が豊後にあり、百合若大臣のモデルになったであろう伝承上の英雄や巨人が存在するなど、「真名の長者（炭焼小五郎）の話と同じように、本貫の地は豊後ではなかろうかと思います。

※　宇佐・柞原八幡・万寿寺・豊後国府など

※　鎮西八郎源為朝・大分の君稚臣など

※　幸若舞　室町時代に出た曲舞（くせまい）。為政者の保護を受けて、幕府の御用の舞となった。扇・拍子・鼓・笛の伴奏で舞う。

一　百合若大臣の物語

先ず、幸若舞の「百合若大臣」と壱岐で神おろしのときに巫女が唱えていた、祭文の「百合若説経」について、かいつまんで紹介します。

「百合若大臣」幸若舞

嵯峨天皇の時、左大臣公満と云う人がいました。公満には跡継ぎの子がいないので、大和の泊瀬岡寺（観音）に願をかけて男子をもうけ、百合若と名付けました。百合若は十七歳で右大臣になり、大納言顕頼卿の姫君朝日を御台所に迎えました。

やがて、蒙古の大将両蔵、火水、飛ぶ雲、走る雲が四万艘の軍船をひきいて博多に来襲しました。我が国は弓矢の上手を集めて防ぎ戦いましたが、敗れて山口へ逃げ帰りました。朝廷は「百合若大臣を大将にせよ、神も合力する」と云う伊勢神宮の託宣により、百合若大臣を大将にして博多につかわすことにしました。百合若は神託に従って鉄の弓に三百六十三本の鉄の矢を携え、手勢三十万を卒き連れて博多に向かいました。

ところが、神風が吹いて蒙古軍が一時唐土に引き上げたので、百合若は蒙古の再来に備えて博多に陣を敷きました。そこで朝廷は百合若大臣を筑紫の国司に任命しました。百合若は御台所を伴って豊後の国府に館を構えました。数年後、百合若大臣は朝廷の命をうけて、新造の大船百艘大小あわせて八万艘の軍船をひきいて唐土へ打って出ました。両軍は唐土との潮境、ちくら沖で対峙しました。

蒙古の大将両蔵が船の舳に立って「我等が戦の手立てには霧を降らす習いぞ」と云えば、麒麟国の大将が「承る」と云って青い息を吹き出すと霧になり、初めはうすく次第に厚くなって、月とも日ともわきまえず百日百夜降りつづきました。大臣は潮を掬いあげて「六十余州の神々、この霧を晴らし給え…」と祈ったら、「霧はほどなく、雪より早く消え」たので、百合若は喜んで艀を下ろして蒙古船に襲いかかりました。三百六十三筋の矢を殆ど射つくして、両蔵を倒し、火水に腹を切らせ、飛ぶ雲、走る雲を生け捕りにしました。残った一万艘の蒙古船は唐土に追い返しました。

勝利をおさめた百合若は、「いずくにか島やある。上がりて身を休めん」と傳（後見）の別府兄弟に命じ、玄海島に上陸して岩角を枕に「夜日三日まどろみ」ました。悪る賢い別府兄弟は大臣を島に置き去りにして本船に帰り、家来達に

「君は両蔵の矢をうけて、ついに空しくなり給う。海底に沈め申したり。」と告げて船を出し、筑紫の博多に帰り、直ちに京に上り朝廷に勝ち戦を奏聞しました。朝廷は百合若の後任として別府太郎を筑紫の国司に命じました。豊後の国府に下った別府太郎は、百合若の御台所に横恋慕して結婚を迫るようになりました。御台所は「宇佐の宮に詣らせ給ひ、千部の経を書き読まんとの大願を掛け」、その日を日一日と延ばしました。御台所は「君が面影の夢現に立ち給うときは、死したる人とは見え給わず…」と生存を信じ、自害も出来ず堪えていました。御台所は身のまわりの品々を人に与え、犬馬や鷹まで解き放しました。

ところが、百合若の愛鷹緑丸は、飯をくわえて、三日三晩跳び続けて玄界島にたどり着き、百合若に巡り会うことができました。百合若は柏の葉に指の血で書いた文を緑丸に持ち帰らせました。歓喜した御台所は紙、筆、硯を鷹の脚に結わえて運ばせますが、緑丸はあまりの重さに玄界島の渚でこときれました。

百合大臣の言傳の文を見た御台所は、宇佐宮に七日間お籠もりして、大臣に「再びお目にかかるならば、宇佐宮の造営申すべし。玉の宝殿磨き立てて、金の扉をのべ開き…」と願かけしました。

別府太郎は御台所の心がなびかないので、とうとうまん萬能池に沈めてしまいました。実際は門脇の翁の甥忠太の娘萬寿姫が身代りになりました。

宇佐宮への願いが叶えられて、壱岐の釣り人が南風に吹かれて北の沖へ流され、玄海島に吹き付けられました。釣り人は島で異様な生物に出会い、逃げまどいながら「汝は如何様な異形者ぞ」と尋ねると、百合若は別府兄弟側の者かも知れないと思い「これは、蒙古へ討手に赴きしとき不思議に船に乗り遅れ、早や三年になると覚え候。御情にて日本の地へ着けてたべれ」と頼みました。やがて、御台所が念じた甲斐あって、俄に順風が吹き始めて百合若は無事に博多に帰り着くことができました。

「人かと見れば人にてもなし、鬼かと思えば鬼にてもなし、唯餓鬼とやあらん」姿で豊後の国府に帰り、苔丸と名付けられました。

やがて、恒例の正月弓始のときが来ました。別府太郎は「けうがるもの（変わった者）を拾いて養いおくと伝え聞く。具して参れ」と命じました。苔丸は矢取りの役になりましたが、「是なる殿の弓立ての悪さよ。あれなる殿の押しての下

手なる」、とか「弓勢のよわし」などと嘲笑しましたので、別府太郎は「きやつは曲者、大臣の鉄の弓矢を射させてみよよ」と云って百合若の弓矢を渡しました。

弓矢を受け取った百合若は「的には目もかけず、別府の太夫に目をかけ、大音上げて仰るに…我をば誰と思うぞ、島にすてられし百合若大臣が春草と萌え出る。…いかに、いかに」と弓を引き絞ると、並み居る大友諸卿、松浦党の一同はかしこまって平伏しました。別府太郎も命乞いをしましたが、大臣は太郎を松の木の結えて舌を引き抜き、首を切って引きまわしました。

やがて、百合若大臣は御台所を伴って都に登り、日本国の将軍になられました。

幸若舞は一応完成されたものですが、古い形として、折口信夫が「壱岐民間伝承探訪記（昭和五年）」に、壱岐のイチジョオとよばれていた巫女が、神降ろしの祭文として唱える「百合若説経」が「民俗学（一巻五号）」に載せられています。この分を仮に「其の一」とします。

ゆりわか大臣は、桃から生まれた人で、幼名は桃太郎と云ふた。年頃になって、嫁をとらねばならぬ様になって、親たちが色々とすすめても『顔の長いは馬面づら　髪の長いは邪心髪（蛇身？）　鼻の低いは杓子づら』と云ふて断わ断りした。ところが、王様のお姫様が美しいと云ふ噂を聞いて、御殿の風呂焚きになって住み込んだ。お姫様は、桃太郎の嫁になろうと言われたが、王様は、鬼ヶ島退治をしをふせたら、嫁にやろうと云われた。

其れで、名も百合若と改めて、七十艘の船を引き連れて、此壱岐の島に着いた。船の碇をおろしたのが、今の黒崎の唐人神の下の處になる。

其の時分、此の国は鬼のすみかで芥満国といふのであった。鬼の太郎・鬼の次郎など云ふ大将が居た。百合若が来たのを見ると、盛んに礫を打った。其石が、今も鬼の礫と云ふて残っている。

百合若が、日の丸の扇をあげて風を払ふと、礫が来ぬ。とうとう鬼は皆退治られた。日本への土産に一疋の小鬼を残して置いた、気がつくと、鬼の起こした風で家来の人々の乗った船は、皆吹き散らされて、帰ることが出来なくなった。それで、小鬼を使うて、海の物をあさらして、其れを喰うては、命をつないだ。食ひ物は、皆小鬼の臍で沸らせて食うたのである。

ある時、地方から風で吹き寄せられて、鰯ひきの船が流れついた。連れて地方へ渡してくれと頼むが、鬼と見違えていやだと云ふ。其れでも、いよいよ連れて戻って貰ふ事になる。小鬼に言ひ聞かせるには、炒り豆に芽の出るまで戻るなと云ふて、日の丸の扇で天竺へあふぎ上げた。船ばりにからだを縛らせて、やっと地方に還ることが出来た。

王様の御殿に来ても、誰も百合若を見知らぬ。

ところが、御殿の鹿毛は前から、百合若より外に乗りこなせるものがなかった。ある時この馬に乗ってみせた。百合若が乗ると、さしもの荒馬が、見事に乗りこなされた、碁盤の上に後脚で立った。それで、百合若と云ふことが知れて、お姫様を頂いて、王様の跡目を相続した。「民俗学一の六」

壱岐にはもう一つ、後藤正氏蔵の「百合若説経」イチジョウから聞いた「其の一」とやや筋が違います。

この「百合若説経」を「其の二」とします。

都の六条に内裏を立てるとき、朝廷の東西南北に長者の御殿を建てました。中でも東の朝日長者は位も高く十人の子持ちでした。西の二条の屋形の萬の長者は、山ほど財宝はあるが跡継ぎの子供がありませんでした。あるとき二人は宝くらべをしましたが、子宝に恵まれない萬の長者が「百の倉より子が宝」と負けてしまいました。萬の長者は「萬能長者とも云ひ、西のかたは九州臼杵の炭焼小五郎がことなり、という説もいでたる」と書き添えられています。

萬の長者夫婦は清水の観世音に願掛けをしたところ、御台所は観音様が袂に百合の花を入れた夢を見て、めでたく男子を出産しました。長者は若君に百合若の大臣と名付けました。百合若は天狗から兵法を授かり、文武両道に優れた若者になりました。

十五歳の時、将軍の一人娘輝日姫の評判を聞き、屋形に忍び込んで契りを結び、女姿して短尺売りに化け姫を葛籠に入れて連れ出しました。長者夫婦は喜んで祝言を上げようとしましたが、将軍の許はもらえませんでした。

そうこうする内に、内裏の戌亥（北西）の方から妖しい光が射してきました。博士が占ったところ、その光は芥満国の悪路王（悪毒王）の目の光りだと分かりました。悪路王は身の丈一丈六尺もある三面鬼神の大鬼で、五万の小鬼どもひきいる大将でした。将軍はこのことを聞いて、鬼退治をすることにしましたが、怖がって大将を引き受ける者がありませんでした。評議の結果「百合若大臣はまだ十五歳の若者とは申

せ、観音化身の身にまちがいなし、天狗の秘密を請けたる者也。彼ならずては大将はよもあらじ」ということになって、百合若大臣が大将にえらばれました。将軍も「芥満国の鬼どもを征伐せよ。鬼退治して帰国申せば輝日は妻と相とげさせ、日本の将軍と祝て得さすべし」と大将に命じました。百合若は「…百人引きの大弓に鋼の弦打ちこみ、口一尺八寸の大かりまた二本揃えて下さるべし」と、大弓を携(たずさ)えて式部太夫兄弟を供にして芥満国に攻め込みました。

芥満国では悪路王を倒し、小鬼どもを平らげて大勝利をおさめました。ところが、芥満国の小島で式部太夫兄弟は、昼寝をしている百合若を見捨てて帰国してしまいました。

それから例の如く、輝日の前が放った愛鷹みどり丸が島に飛来して、大臣と連絡がとれました。

ある夜、宮崎浦に住んでいる太郎、次郎、三郎と云う漁師の枕神に清水観音が立ち「芥満国に網を引きたる者ならば、宝の山を引かすべし」とお告げがありました。百合若は、観音のお告げに従った漁師のお陰で日本の宮崎浦に帰ることができました。

式部太夫のばばが「何方より参りし者とはしらねども、片目つぶれし片ちんばが奉公望んで参りけり。痩せ馬飼いなりと申す」と云って式部太夫に大臣を引き合わせました。

この時、百合若は「『吾は百合若なり』と宣(のたま)いて、弟式部次郎は矢にて胴中より二つに切れ別れける。太郎はお許しあれと土地に伏したりけるが、高手小手にいましめて七日七夜さらされ、首落さる。」

「御年移らせ給いて、八十八歳…しづかに御崩御召れ候が、神と現れ給うには、九州豊後国の国主の御神、由生原(ゆすはら)（柞原）八幡大神と現れ給う…」（また、輝日の前も宇佐八幡姫神となって現れたとあります。）

二　百合若譚と豊後

一　宇佐・柞原八幡大神・万寿寺

幸若舞の朝日の前は、別府太郎に結婚を迫られたときも、百合若の生存を知ったときも宇佐八幡に願をかけました。説経その二には、百合若は由須原(ゆすはら)（柞原）八幡大神、輝日の前は宇佐八幡（姫神）になって現れたと、両大神の本地物(※ほんじもの)になっています。

また、「大分の歴史9」に「百合若説経によれば、『柞原八幡宮の二ノ殿に、武内宿祢(たけのうちすくね)とならんで百合若大臣の神像が安置ありたること』とあり、左大臣・右大臣として祀られたも

のであろうか。」と書かれています。やはり、百合若大臣と府内の柞原八幡とは何らかの因縁があると云えるでしょう。

宇佐・柞原八幡や万寿寺が語られるのは、百合若譚が豊後と関わりがあるからだと思います。

なによりも興味を牽くことは、幸若舞の百合若大臣が博多で筑紫の国司に任命されながら、役所を豊前の国府ではなく、豊後の国府に定めたことです。また、説経其の一の萬能長者についても、わざわざ「萬能長者とも云ひ、西のかたは九州・臼杵の炭焼小五郎がことなり、という説もいでたる」と註書きを入れていることです。勿論、萬能長者は真名の長者（炭焼小五郎）のこととしているのです。

後で詳しく述べますが、舞の本にある、御台所の身代わりで萬能池に身を投じられた萬寿姫を供養して建立したのが萬寿寺だと云われます。

※　本地物　神・佛・社寺の縁起を基にした語り物や読本のこと。幸若舞に真名長者のことを詞にした「烏帽子折」があります。真名長者の娘が観音の申し子で、宇佐八幡の姫神となる本地物と云われる。

二　コッケー・ムクリー（鬼退治）

本来、百合若大臣譚は、大江山の酒呑童子や羅生門の茨木童子を征伐した英雄譚や桃太郎や一寸法師のお伽噺話の鬼退治の話の範疇に入ります。「豊後伝説集」に次の百合若の鬼退治の話があります。

「…百合若の城は高崎山にあった。あるとき百合若は父の城主に、鬼界が島に鬼退治に行くことを乞ふた。父は「お前が若この山にある八畳敷の大岩を持ち上げることが出来たら許さう。」といったので、百合若それを差し上げて豊後湾に投げ込んでしまった。

因みに、百合若が豊後湾に投げ込んだ、八畳敷きの大岩は八畳石と云われ、両郡橋南の磯（倉谷）にありましたが、今は国道十号線の下になりました。

壱岐の百合若説経は何れも鬼退治ですが、幸若舞では蒙古の両蔵征伐で、相手は奇怪な術を使いますが鬼は出てきません。

大分にコッケー・ムクリーと云う方言があります。コッケーとは高句麗、ムクリーは蒙古のことだそうです。元寇の時に高句麗と蒙古軍が壱岐・対馬で働いた残虐で獰猛な行為が、まるで鬼のようだったと云うことから、鬼のような怖い怪物

のことを呼ぶ言葉になったそうです。幸若舞ではこの物語をまことしやかにするために、蒙古来襲の場面を借りたもので、「蒙古」には「ムクリ」とふりがなが付いています。

本来、豊後の百合若譚は、「豊後伝説集」にもあるように、鬼界が島が鬼が島だったのです。ところが、文芸的に完成された幸若舞の「百合若大臣」では、豊後の方言でムクリと呼ばれる姿を変えた鬼が登場するのです。ただ、ムクリーが豊後だけの方言であるとしてです。（富来隆）

三　萬寿姫の身代わり（萬寿寺）

朝日の前がなびかないことを怒った別府太郎は、

「…御台所が別府の云うことを聞かぬによって、まんのうが池に生きながら芝漬けせんとするを、乳母聞きて、御台所と同年の姫を沈めて御台所をかくし給ふ。…」

乳母の話を聞いた門脇の翁の甥の娘が身代わりになって入水しました。この身代わり話は、幸若舞と豊後の伝承のみのようです。

府内（大分）に蒋山萬寿寺と云う古刹があります。江戸時代の初期頃までは殆ど廃寺であったそうですが、寛永頃に再興したそうです。同寺の僧乾叟が書いた「禅餘集」に、この寺の縁起として、百合若大臣が御台所に代わって入水した娘の菩提のために建立したとあります。伝承としては、「この娘を萬寿姫と云い、翁が甥の忠太とはかって蒋の生い茂った池に沈めた。由利若大臣が帰国してそのことを聞き、姫の死を弔って池の端に一宇を建てて蒋山萬寿寺と名付けた。」と云います。

宇佐八幡大神は薦枕を依代にします。中津にある薦神社のご神体は、枕になる薦が茂る三角池です。万寿姫のこじつけかも知れませんが、何か宇佐八幡との関わりを感じます。

萬寿姫や安寿姫は中世の姫君の代表的な名前です。身代わりになった忠太の無名の娘に、萬寿の名を借りたとも云えるのではないでしょうか。幸若舞では娘に萬寿の名はありませんが、百合若譚ではこの萬寿寺の縁起の外に他に身代わり話の例を見ません。百合若大臣譚は豊後の伝承を主として作られたと考える大きな根拠となるのではないでしょうか。

「豊後国志」にも百合稚大臣が建立したとの縁起をあげています。

四　大分君稚臣

「太宰管内志」や唐橋世斎の「豊後国志巻ノ四」は大分君

稚臣（稚見）を百合稚大臣に比定して書いています。世斎が「豊後国志」を編むときに大分郡で取材したからでしょうか。

大分君稚臣は、壬申の乱（六七二）に大分君恵尺と共に大海人皇子（後の天武天皇）に味方して、瀬田橋の合戦で獅子奮迅の働きをして大海人軍を勝利に導き、「勇敢き士」と称えられました。大分君稚臣は大分郡の郡司の一族で兵衛として上番していたと云われます。大分君稚臣はその後、豊後の誇りであり英雄として語り継がれてきました。大分市椎迫の石棺式石室を持つ古宮古墳（七世紀中～後期）は大分君稚臣の墳墓ではないかと言われています。

また、大分市上野東に大臣塚古墳があります。十二月二日に萬寿寺で供養が行われています。「豊府紀聞」によると、寛永十二年十月二日、大風で大臣塚の松が折れ、その植え替えのときに人骨や太刀が出土したそうです。それでこの日を「祭祀日」にしたと書かれています。（大分県史　民俗編）

参考までに、中山太郎が「旅と伝説　昭七年五月号」に引用した箇所を上げると、（百巻本に拠る）

「…世に云ふ百合若（原注。或は大臣と称す）、豊後国船居に傳ふる故事なり。百合若塚は船居の菖山萬寿興禅寺にあり。二十餘年前揚宗和尚の時、其塚を発く、石棺の内立る白骨一具あり。亦太刀一柄朽残りし、領主も見られ命じて基の如く埋みて祀られしことなん（原注略）百合若の女を萬寿といふ。郷の菖の池に沈みし後、寺を建て菖山萬寿寺と号す。百合若が奸臣別府太郎同次郎が塚とて別府にあり。高さ二三尺とぞ。百合若の愛せし鷹を緑丸と云ひ、志州の鷹尾村より出して云ふ。云々」

しかし、百合若大臣塚と云われる塚は全国方々にありますが、豊後で百合若譚は江戸時代初期頃からあったと云うことになります。

また、豊後の英雄に鎮西八郎源為朝がおります。為朝は身の丈七尺、剛弓の使い手で高崎山の頂上に的を立てて別府の的が浜から射ったと云われます。「豊後説話集」に次のような話があります。

「…百合若が島から帰って、別府兄弟を討とうとしたら、兄弟は高崎山の山腰を左右に別れて逃げたので、百合若は得意の強弓に矢を番えて放すと、矢は高崎の嶺を越えて向こうに落ち、丁度兄弟が　山を廻って落ち合った所に刺さったので、二人とも一矢で殺された。…」

豪勇無双の弓道の達人として、為朝伝説は百合若伝説の素地の一部をなしている感じがします。

八代に百合若塚があります。所の人は「百合若はいやしき者なり。世に大臣と云うは大人なり…」

つまり、単に大力で強弓を引く巨人であると伝えられています。随分印象が違いますが、剛弓を引く百合若大臣が巨人伝説たる所以です。

三　ユリ（百合若）の名の起こりは？

一　百合の花

幸若舞には百合と命名した謂われについて書いていません。いっぽう説経その一では百合の花と観音様との因縁話があります。

また、「民俗語大辞典」によれば宇佐・柞原八幡の神花は百合の花で、すべての魔を祓いよけるともあります。

我が国の古典文学で百合の花は取り上げられることは稀だそうです。因みに「日本俗信辞典・動植物編」を見ますと「百合を屋敷内に飢えると死者が出る」「白百合は佛に上げるな」「白百合の夢を見ると人が死ぬ」など、百合の花は陰や凶を意味するもののようで、英雄の命名には不向だと思います。

二　ユリ（器）

折口信夫が壱岐で巫女のイチジョウの祭文から「百合若説経」を採集したとは、先にも書きました（折口信夫全集十五巻「壱岐民間伝承探訪記）。

「民俗学一ノ六・壱岐民間伝承探訪記　その一・折口信夫」や「折口信夫の世界・壱岐探訪・山口麻太郎」を参考に神おろしを要約しますと、次のようになります。

イチジョウが祀るのはヤボサ神（天台ヤボサの祭日は毎月二十八日）です。神おろしをするときには八尺二寸もある黒塗りの木弓に麻の弦を掛け、ユリを伏せた上に載せて二カ所をしっかりと結わえつけた呪具を使います。ユリは楕円形の櫃の蓋のような曲げ物（削板）の器です。別府朝見八幡の古祭礼に、「ユリにお祓いの道具を入れて神主に差し出す」。と書かれています。ユリはカミサマの供え物を入れる底の深い曲げ物の盆のような器です。また、古くは霊魂を入れ込める具と書かれています。（民俗語大辞典）

イチジョウは二本の細い竹で弓の弦を叩きながら、祭文を唱えます。イチジョウが神おろしをするときには「百合若説経」を必ず唱えていたそうです。

さて、神おろしは呪術的な行為で、弓とユリは神秘的な現

象を起こす呪具でなのです。中山太郎はユリは憑り（ヨリ）、つまり神が憑ると云う意味であろうと云っています。全国に「弓祈祷」と云って弓と箱や盥を用いる所が所々にあるそうです。「広島県神職会発行大八州弓祈祷私記摘要」に弓祈祷の神歌がありますが、その中にユリワの歌が二つあります。「ユリふたに千年の鶴と萬代の亀が舞遊ぶ今日のめでたさ」「ユリふたをおこして見ればその中に、黄金千両わき出でたり」などとあります。ユリは神霊の宿るもので神秘的な力の宿る神聖な器と考えられます。弓は悪魔退散に弓の弦を鳴らす鳴弦の儀式があるように、弓も呪術的な霊力を宿すとされます。

百合若のユリは神霊の宿る器に附会して命名されたものではないでしょうか。ワカは無垢の少年に神が宿ると云われ、少壮の英雄の意味も籠めて「若」を付けたのでしょう。剛弓の達人である破邪の霊力を宿す弓を携えた若武者として百合若が生み出されたと思います。

ユリワカ話の本質の地はイチジョウの説経が生まれた壱岐で、話が九州の各地に伝播し、呪術的な英雄ユリが一人歩きして豊後にも根を下ろしたのでしょう。しかし幸若舞の詞まで昇華した「百合若大臣」譚の本質の地は豊後ではないかと思います。逆臣伏誅は豊後から逆移入したのでしょう。

四　イタカの王オデッセウス

坪内逍遙が明治三十九年の「早稲田文学」に、百合若大臣譚の「故国帰来、逆臣伏誅」という物語の部分はホメロスの叙事詩「オデッセイア（ユリシーズ）」の翻案であると発表し、室町時代国内発生説の津田左右吉と論争があったそうです。先ず、オデッセイアの筋をかいつまんで紹介します。

一「故国帰来・逆臣伏誅譚」

トロヤ戦争に従軍して勝利を収めたイタカの王オデッセウス（ユリシーズ）は、帰国の途中嵐に流されてトラキヤに漂着しました、その後も漂流を繰り返して数奇な運命を辿ります。イタカではすでに王は死んだものと思われ、妻ペネロペは、財産目当ての王族の求婚者に悩まされていました。ペネロペは父王ラエルテスの屍衣（屍を覆う衣）が織りあがるまでの猶予を約束して、昼は機を織り夜は解きほぐして時間を引き延ばしていましたが、とうとうそれが露見して、ことわり切れない状態になっていました。

多くの苦労を重ねてイタカにたどり着いたオデッセウスは、

乞食に身をかえて再起の機会を待っていました。窮したペネロペは、求婚者たちを集めて宴を開き、夫の強弓を持ち出して、それを引くことができた者と結婚すると告げます。しかし、誰も弓に弦をかけることすら出来ないのを見て嘲笑した乞食が、その弓を引かされることになりました。オデッセイは、たちまち無法な求婚者達をすべて射殺してしまました。こうしてオデッセウスは再びイタカの王になって、ペネロペとともに一生を安楽に過ごしました。（ホメロスの一大叙事詩）

さて、わが百合若大臣の「貴種流離譚」や、この話のようなオデッセウスの「故国帰来、逆臣伏誅」の説話は、これらの英雄が先ずどちらも御曹司であること。また、オデッセイは鉄製剛弓の使い手で、豊後の百合若大臣は愛用の鉄弓鉄箭を使用し、また鉄弓にはに五人張り八人伏せ（約三㍍）の強弓を引いたという達人だったといいます。

両物語には細かい点で幾つかの類似点もあります。例えば、老人の乞食姿で帰国したオデッセイを愛犬のアーガスが耳を垂れ尾を振って嬉しそうに迎えたといいます。豊後の伝説では、髪の毛は五・六尺、爪の長さは三寸も延びて、全く人相が変わって誰も百合若と気付かなかったのに、愛馬の青馬が覚えていて、ぼろぼろ涙を流して喜び嘶いたと云います。また、帰路の壱岐では鬼鹿毛という愛馬が百合若を覚えていて七重の膝を八重に折って迎えた、とも伝えています。

百合若は鬼界が島に渡り、鬼に降参を勧めたが、鬼は「睨みっこ（目性くらべ）して負けたら降参しよう。」と云ったので、百合若は豫め持って来た二つの鉦を以て眼としたので、ついに鬼が負けて降参したとか、或いは説経「其の二」の内裏を射た悪路（毒）王の妖しの目の光りも、人喰い鬼の一眼鬼族の話らしきものが一寸顔を出しています。

もし、百合若大臣譚がオデッセイアの翻案とするならば、どのようにして輸入されたのでしょうか。中国経由でしょうか。西洋から直接輸入されたのでしょうか。

中国経由で伝来したのでしたら古くは唐でしょう。天平の頃にシルクロードを経てギリシャの文化が到来していますが、ギリシャの叙事詩が伝わったとは、私の知る限り、中国にも我が国にも聞たことがありません。明以降に伝来したのなら、何らかのかたちで読み本（草紙）に現れてくると思います。幸若舞の「百合若大臣」が室町時代の作とするならば、それも考えられると思いますが、「百合若大臣」の読み本を取り上げた学者はいないようです。

二　キリシタン

どうもオデッセイアは西洋から直接受け入れたと考える方が正しいように思えます。

天文二十年（一五五一）、大友宗麟に招かれてフランシスコ・ザビエルは府内で布教することを許されます。翌年、インドから神父バルテルザル・ガゴ、イルマンのペトロ・ダルカセバ、ドワルテ・シルバ、船長ドアルテ・ダ・ガーマと日本人通詞の五人が来航して、府内に礼拝堂を建てて布教を始めました。府内の信者はたちまち六・七百人になり、子供達が西洋音楽を演奏したり宗教劇を演じたと伝えます。信者は布教の合間に珍しい西洋の説話などを興味深く聞いたことでしょう。戦塵の消えやらぬ当時としてはオデッセイアは格好の話題だったのではないでしょうか。

弘治元年（一五五五）にはルイス・アルメイダが府内に育児院や病院を建てます。豊後のキリシタンは千五百人。その後もバリニャーノが臼杵にノビシャド（修練院）、府内にコレジオ（学林）を建てて豊後にはイソップ物語も伝わりました。府内は布教の中心となり、西洋の雰囲気も可成り普及していたとおもいます。

百合若大臣譚は、豊後のキリシタン達が、オデッセイアの叙事詩を桃太郎の鬼征伐の民話を土台にして主人公にオデッセウスを重ね合わせ、異色の英雄譚の基を作ったのではないかと思います。

ユリシーズ（オデッセウス）の百合の元は。もし、キリスト教の布教者がギリシャの叙事詩を持ち込んだとしますと、主人公はローマ名のウリッセス（ユリシーズ）かギリシャ名のオデッセウスだっただろうと思います。彼等は主人公の固有名詞はラテン語でオデッセウスですが、ユリシーズの方が、百合（ユリ）となじめたのかも知れません。

五　桃太郎と百合若

最大の疑問があります。豊後の百合若譚が、壱岐のイチジョウの説経の百合若譚がどのようにして結びついたのでしょう。

百合若譚は、「申し子」「鬼退治」という日本の昔話の典型の一つです。「幸若舞」や説経「その二」の百合若も観音様の申し子で、「その一」の桃太郎も一寸法師と同じように異界から降誕した神童でした。

「はじめに」にも觸れたように、それぞれの地方の民話同士が出会って取捨選択されながらお話の筋がふくらんで、まとまった筋の語り物になって行ったと考えられます。

本来この話の原型は説経（其の一）のような桃太郎の鬼退治話で、壱岐では桃太郎がユリワカと云う名前で語られるようになり、それが豊後に伝わって鬼退治話の主人公がユリワカになり、豊後の観音の申し子話、宇佐八幡の本地物や異色の故国帰来・逆臣伏誅の結末話が、壱岐の説経に取り入れられ、やがて、この語り物は幸若舞の「百合若大臣」として大成したのでしょう。

つまり、この話の基木は何処にでもある「申し子」「鬼退治」ですが、結末に「オデッセイア」が接木されてユニークな筋立てになったと思います。

市場直次郎の「百合若伝説私考」、中山太郎の「百合若伝説異考」（昭和六年版の「旅と伝説・二月号」、「同五月号」）折口信夫の「壱岐民間伝承探訪記(民俗学一の三・四)」の論考を整理している内に、僭越にもにも私考も交えてまとめてみようと思いました。

百合若大臣譚は鬼退治話の範疇に属するもので、豊後が発祥の地ではありませんが、真名長者の話や宇佐八幡信仰とキリスト教が運んできたオデッセイアなどが背景になって、豊後に相応（ふさわ）しい話になっていったように思います。

六　いまだに残る疑問

私としては、一応結論めいたものを出した積もりです。ところが、金関丈夫（かなせきたけお）が中山・市場・坪内説に対して「木馬と石牛　岩波文庫」で問題点を指摘しています。要約しますと。

天文二十年正月に、山科言継（ことつぐ）邸で演じられた幸若の「ゆり若」が（「山科言継卿日記」）幸若舞の「百合若大臣」と同じ内容だとすると、これはそのころすでに成立していたことになります。もし伝来したオデッセイアが幸若舞に取り入れられて、完成するまでの期間を最大見積もっても、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に渡来した天文十八年七月から、天文二十年までに僅か二年とは迅速（じんそく）過ぎはしないか、とのことです。この点は中山先生も疑問にされていますが、「元木の上に接木したにすぎないので、」（さしたる時間はかからないのでは）と云っておられます。金関先生は、ホメロスの叙事詩そのものが輸入されたことは、歴史的に証明されていないと云われています。

オデッセウスや百合若の強弓、海上漂流、帰国して他の求婚者に打ち勝って妻を得ると似たような話は、古代インドの説話でサンスクリットの叙事詩「ラーマヤーナ」や「マハーバーラタ」にも見られるそうです。金関先生はこのような説

話は、世界中に分布する「複数の太陽を射落とす」と云うモチーフの説話のように、「古代文学発展前の、東西共通の民間説話の一つとして、同一のモチーフが、ギリシャにもインドにも日本にも普及し、それぞれ細部の変化を含みつつ、独自の展開を遂げたもの、と見るべきであろう。」と云われています。日本では百合若のモチーフが「応神記」の宇佐に使いした武内宿禰（たけのうちすくね）の話に見られるそうです。また、オデッセイアに欠けている「鳥の使い」のモチーフは「神武伝」に見えるとのことです。

また、中国の民間伝承中の英雄平貴（ピンクェイ）を主人公とした京劇の「薛平貴（しゅんぴんくえい）」が「百合若説経」や「百合若大臣」や「オデッセイア」「マハーバーラタ」とよく似た内容だとも書いてあります。

いずれにしても百合若大臣譚はグローバルな立場から眺め直してみる必要があると思います。

おわりに

全てに近代化が進んだ現在、生活上の習慣や伝承、信仰などの面から日本人の心の本質を学ぶ「民俗学」は、今では文献資料に頼らなければ学ぶことが出来ない時代になってしまいました。

百合若などの説話・伝承・民話なども、現代の日本人の心から遠ざかって行くようにあります。郷土の歴史や風俗、伝承への関心が盛り上がった大正・昭和初期に、様々の研究者の採集・記録や論考を掲載した機関誌の多くが、すでに眼に触れることの出来なくなったことは残念です。

参考文献　「旅と伝説（前掲）」「民俗学（昭四・九月号）」「日本民俗文化大系・四、十一巻」「柳田国男全集」大分県史・民俗編」「大分の歴史」「折口信夫全集・古代研究」「折口信夫の世界」「木馬と石牛」

完